

第二章  
スマートシティ

新しい街造りの映像が終わると山本が田中に微笑む。

『『便利な街を』と言うけれど『スマートシティ』ってピンとこないなあ』  
大家も追加する。

『『スマート』とはなんじゃ？』

『あの人はスマートだ』って言うけれど『かつこいい』とは違うような気がする』  
田中と大家に山本が軽く首を横に振る。

『『賢い』という意味だけれど『ずる賢い』というときもスマートって言うようだよ』  
「スマートシティを促進する政府の説明は？」

『『省エネルギーでクリーンな交通インフラを整備して住みやすいニューシティライフを国民に提供する』と言っていきます。いつものことだけれどカタカナが多くて抽象的な説明ね』

「えー。山本さんに『分りにくい』と言われたんじゃどうしようもない」

「ITやAIを利用して総合的に俯瞰的に新たに街を造るって言うことらしいの』  
「やめてくれ！ 総合的とか俯瞰的とかITとかAIなんぞの言葉を使うのは！」

大家がわめきちらす。

「じゃあ人工知能が……」

「英語やアルファベットを日本語に直しても一緒じゃ。分からんモンは分からんのじゃ」

「じゃあ大家さん、散歩にでも出かけてください」

「なに！ ハミゴにするのか」

「ハミ子？ ハミ老人の間違いでは？」

悪気で言ったわけではないが田中のこの言葉が大家を激怒させる。

「わしゃ完全に怒った」

しかし言葉とは裏腹に大家の表情は変わらない。要は「易しく解説しろ」と言うことだ。少し間を置いて田中が山本に尋ねる。

「人工知能って言うのは本当に賢いのかなあ？ でもずる賢こそうには見えないなあ」

『『人工知能は賢い』』と言い回している人の方がずる賢いと言うか、怪しいわね」

「人工知能に丸投げするんじゃないから、使う人間の問題なんだから？」

山本が頷く。

「人工知能に代表される先進技術を使えばいい街ができるという考え方には賛成できないわ」

「わしもそう思う。例えば人工知能が違法駐車や放置自転車を摘発したり撤去したりして暮らしやすい街にできないじゃろ？」

「新しく街を造るどころか、今の街を住みやすくすることさえできない。そうだ！ 新しいことを言うともマスコミが飛びつくから大げさに言っているけれど、今住んでいる街をスマートにして欲しいな」

「田中さん。大家さん。このアパートの周り以外とスマートだわ。特にこのアパートは住みや

すい」

近くに小川が流れ四季折々の花も咲く。大都會の中で田中が住むこのアパートの周辺はオアシスのように潤いがある。

突然テレビから山本が消えて高速鉄道が失踪する画面が変わる。

「例えば都市間を走る鉄道は高速です。でも市内の地下鉄は各駅停車だわ。各駅停車なら地下でなく路面電車でもいいのかもしれないわ」

のんびりと走るノスタルジックな路面電車が揺れながらゆっくりと街の中を走る古い映像が流れる。

「自動車が多くなって子供や老人や障害者、いわゆる交通弱者に優しい路面電車が排除されたわ。元気な大人が自動車に乗って……裕福な人たちは高級乗用車に乗って我が物顔で道路を走り回るけれど、経済的に恵まれない人は身をすくめて道路の隅を歩かなければならないわ」

「僕は歩いていても思うんだけど、なぜ歩行者信号の青より自動車信号の青の方が長いのか、不思議で仕方がない。車椅子の人なんか青信号になって渡りかけても渡りきれないうちに信号が点滅する」

「それにじゃ、車はクラクションを鳴らして歩行者を威嚇できるが、歩行者はメガホンを持っていない。だから車に頭を下げて道を渡らなければならぬ」

「確かにそうですね。でも僕が言いたいのは、信号はもっと歩行者に便利ないように規則を変え

るべきだと言いたいのです」

「はて？」

大家在田中に説明を催促する。

「例えば南北方向の自動車用の信号が青から赤になると、次は歩行者信号のすべてを青にして南北、東西、斜め横断すべて自由にする」

「スクランブル交差点ね」

「歩行者信号が赤になると今度は東西道路の自動車信号を青にする。そして赤になると再びすべての歩行者信号が青になる……」

「そうか。今のスクランブル交差点では東西に走る車、そしてその次に南北を走る車と、車を優先している。歩行者が交差点を渡るチャンスは三分の一じゃ。それを交互にして二分の一にしようというのじゃな」

「特に歩行者が多い交差点ではそうすべきで、逆にそんなところはあえて自動車の通行を不便にすべきです。ただし市バスは別ですが」

「そうすれば老若男女、健康な人も障害のある人も便利に歩けるわ。昔のように歩行者天国をもっと作るべきだわ」

「だいたい自動車は公共交通機関が行き届いていないところに利便性をもたらす交通手段として、あるいは物流手段として普及した道具。それがいつの間にか歩行者を道路から追い出して

我が物顔で走るし駐停車違反して迷惑をかける道具になってしまった。しかも空気を汚すし車一台を製造するのにかなりのエネルギーを消費する」

「田中さんの言うとおりだわ。わずか百キログラムもない人間を何トンもの鉄の塊が、しかも膨大なコンクリートやアスファルトを使った道路を移動させるなんておかしな話だわ」

「それだけですまんのじゃ。これまでどれほどの人間が交通事故で死んだことか」

「そんな矛盾というのか、そんな問題を解決しようと、なんとかシティという構想を政府が提唱しているには見えないわね」

「政府が？ 散々自動車を普及させたた政府が？ だいたい政府の言うことは信用できん！」

\*\*\*

「振り出しに戻るがスマートシティというかぎり、今の都市はメタボシティと言うことか。まっ、確かにそうじゃな」

「反メタボシティと言ってもわかりにくいですね。それなりの専門家がそれなりのことを主張していますが統一的な見解や定義はないようです。大家さんがおっしゃった意味でスマートシティを説明する方がいいのかも知れませんか」

「でもメタボシティって？」

「スマートシティでないのがメタボシティじゃ」

「はー？」

田中がずっこけるが山本は大きく頷く。

「名称は田中さんの言うとおりの都市というか街は交通弱者に優しいとは言えないわね」

「みんなに優しい街がスマートシティ」

「みんなが優しい心を持ってば優しい街になるのじゃ」

「具体的に今の街にはどんな問題点があるのかしら？」

「まず問題点のあぶり出しじゃ。政府は問題を解決できないから目先を変えようと、あるいは建設や自動車などの業界からの要望もあつて新しく街を造ろうとしているのかも知れんが、本当に問題点と解決策を検討したのじゃろうか」

すぐ田中が問題点を提起する。

「たとえば駐車違反や放置自転車など何とかならないのか。新しく街を作ったらそんな事は起こらなくなるのか？」

全員が「うーん」と言ったまましばらく黙る。田中が思い出したように抜け出す。

「この間バス停に違法駐車している車がいて……」

田中を遮って大家が両手を挙げて興奮する。

「いるいる。普通はそんなところに駐車する車なんかいないから、逆に止めるやつがいる。そんなところに駐車しないようにするには……うーん」

意気込みすぎて言葉が続かない。

「バスが停車するところを真っ赤に舗装する？」

「それよりバスの塗装をパトカーにすれば違法駐車車の車は慌てて逃げるかも知れんぞ」  
すかさず山本の声がする。

「白と黒のツートンカラーにするの？ それならパンダ風にして欲しいわ」

「パンダ風？ 迫力ないなあ。高級車のドライバーは強面の人が多い」

「自分で買ったんじゃないでしょうけれど高級車に乗っている若い人のマナーも悪いわ」

「もちろん歩行者もスマホ歩きしたりマナーの悪い人もいるけれど」

ここで田中が思い出したようにしやべり始める。

「さっきの話を続けるね。この間急に雨が降ってきたのでバスに乗ろうと交差点手前の停留所で待っていたらそこに自動車が止まっていた。車椅子に乗った人と介添人が僕の前にいたけれど一向に雨はやまない。やがてバスが来たけれど……」

田中の話の続きはこうだ。

バスがクラクションを鳴らしてもその自動車は移動する気配すらない。歩道と車道には段差があるからバスを停留所に横付けしなければ車椅子の人は乗れない。カップを着ているけれどバス停には屋根はないので付き添いの人共々ずぶ濡れになっている。

それを見た田中はたまりかねてその自動車の助手席の窓をたたいたけれど完全に無視された。おとなしい田中もついに堪忍袋の緒が切れて持っていた傘をたたんで先で窓を小突く。す



るとガラス窓がほんの少し開いて中から「バカヤロー」と罵倒された。

そのとき同じくバスを待っていた人たちがその自動車を取り囲んで騒ぎ出す。

「ここはバス停ですよ」

「車椅子の人がバスに乗れません」

いつの間にかスマホを持った人がその自動車の前に回って写真を撮り出す。

「警察に連絡する」

誰かがそう言ったときに田中が大声を上げる。

「あつ！ おまわりさんだ！ 呼んでくる」

この言葉にこの車は急発進した。

なんとかバスが停留所に横付けになり運転手を制してみんなで車椅子を持ち上げバスに乗らせた。全員びしょ濡れになった。でもお構いなしだ。みんな乗り込むと大声で笑おうとしたが三蜜なので拍手に変更した。

自動車に乗っていた人もこの雨で困っているだろうと家族か知人を迎えに来ていたのかもしれない。しかしその自動車は外国製の高級スポーツカーだった。いずれにしても交差点に近いバス停に駐車していた。明らかな交通違反だ。

\*\*\*

最近路上駐車が少なくなったが、なぜか歩道に乗り上げて駐車する。歩道を歩く人のことは

眼中になく他の自動車の通行に邪魔になってはと気を遣っているのだろう。歩行者がそんな自動車を避けるために道路真ん中を歩かねばならず、そんな時に他の自動車が来るとクラクションを鳴らされてしまう。歩行者にとって理不尽なことだ。

放置自転車も問題だ。一台の自転車が道路に駐輪するといつの間にかおびただしい自転車が駐輪違反する。特に地下鉄などの出入り口やバス停近くがひどい。そこまで自転車であつて電車やバスに乗り換えるのだろう。

不思議なことにきちんと並べて駐輪する。出しやすくするためにお互い気を遣っているのだろうか。もしそうなら歩行者に気を遣って駐輪しないようにすべきだろう。

さて、いずれにしても地下鉄やバスを便利に利用するためには乗り場付近に自動車の駐車や自転車の駐輪を禁止されている。歩行者は立ち止まってもその占有する面積はしれている。自転車は歩行者の数倍の面積を占有する。自動車に至っては歩行者の何十倍以上もの面積を占有する。すべてとは言わないが自動車を持っている人は比較的裕福だろう。

一方公共交通機関を利用する人は比較的質素な生活を送らざるを得ない人だろう。しかも身体にハンディを持つ人で生活に苦労している人は先ほどのようにバスに乗るのも苦労する。このような駐車や駐輪違反はやめてほしいものだ。

「それにしても道路は車のために造られているように見える」

「どうということじゃ？」

「だって歩道のない道が圧倒的に多いじゃないですか」

「そうじゃな。交通量の多い道路は車道と歩道の区別はあるが、幹線道路から一筋入ると歩道のない道が多い」

「でしょ。白線で区別しているのはまだマシな方で、まったく区別のない道が結構多い」

「そんな道で駐車している車を避けるために歩行者は道の真ん中を歩くことになる」

「しかしじゃ、身体の不自由な人が乗り降りする車や配達の場合は駐車せざるを得ないぞ」

「そんな車は長くても数分しか駐車しないし、歩行者も迷惑だとは思わないでしょう。いわゆる『お互い様』です」

「確かに。歩道があってもお構いなしに乗り上げて駐車する車も多い。歩行者に迷惑をかけても車同士は気を遣うと言うことか」

「いえ。『狭い道に車を止めて迷惑だ』とクラクションを鳴らされるからです。これは変な意味での『お互い様』です」

「なるほど。歩行者が同じように思ってもクラクションを持ち合わせていないし、その車を避けて前に進めばいいだけじゃ」

「一方、車は通れなくなる。だから怒りのクラクションを鳴らし続ける」

「なんとかならんのかのう」

「本道と段差のある歩道であっても車は乗り上げて駐車する」

「ガードレールが必要ね。そういえば学校の周りにはガードレールで守られた歩道が多いわ」  
「まずは道路というモノは歩行者のためにあるという発想で作るべきだ」

「幹線道路では百メートル以上も横断歩道がないところがあるわね。行きたいのは道路の向こう側なのに随分先の交差点まで行かなければ横断できない。車をスムーズに流すことを優先して歩行者の不便などまったく考慮していないわ。まるでそんなところを横断するのなら命の保証はしませんと言う発想で道路が作られているわ」

山本のスマートシティに関する総括的な解説が始まる。

自動車のためだけに道路があるわけではない。身体に不自由な人も同等に道路を利用する権利がある。そういう人たちが安心して道路を利用できる街がスマートシティといえるのではないか。

新たにスマートシティを造るとすればどれだけのお金が必要になるのか想像できない。そしてどれだけのエネルギーが必要なのかも、つまり二酸化炭素の排出量がどれくらいになるのかというデータも示されていない。

今ある施設設備を上手に活用すればここかしこに本当の意味でのスマートシティが誕生する。問題点と解決策を検証してスマートシティを造るというのなら反対する国民はいないのではないか。このことは国や人種を越えて共通の思いだと確信する。

ずる賢いスマートではなく弱者の賛同を得ることができるフレンドリーシティを目指すこと

が大事だと……。

山本がにこやかに解説を終えると画面がブラックアウトする。

\*\*\*

「待ってくれ。わしにも総括させてくれ」

大家が山本を呼び止める。

「世の中『AI』だらけじゃ。政府もデジタル庁を創設して電子化を促進すると意気込んでるが、それならAI技術で、まず今の都市が抱える問題を解決すればいいのじゃ」

田中が驚いて大家を見つめる。

「おっしゃるとおりです。ある意味、モノを造るのは簡単です。でもそれが故障したら結構修理が大変。特にモノがあふれる時代になってからは修理せずに新しいモノに取り替える。その方が簡単だしコストも安い。でもAIに相談すれば果たして『もったいない！修理しよう』と判断するのかなあ？」

一旦電源の切れたテレビ画面が明るくなって田中に微笑みかける山本が現れる。

「さすが、田中さんだわ。残された地球の資源を計算すればAIは『修理せよ』と判断すると思いたいけれど、そう判断しないでしょうね」

「というより判断できないと思います」

「なぜじゃ」

「まず地球に残された資源をAIは計算できません。なぜなら残された資源というのは一体何を指すのか、分からないからです」

「原油、鉄鉱石、レアメタル……」

「レアメタルは重要な資源だと言われていますが、つい数十年前までは見向きもされなかったモノもあります。だから今必要とする資源の種類や量がよく分からないのです」

大家が首を捻る。

「新たにモノを製造するときは材料も種類や量はある程度計算できますが、造ったモノを維持修繕する量は意外とよく分からないのです。それ以上にもっと重大なことがあります」

「どうということじゃ」

「モノがいつ壊れるのかよく分からないのです。でもいつかは壊れます」

山本が追加する。

「いくらAIが賢くても予測は無理ね」

「なるほど」

大家が座り直す。

「モノを造るのはそれなりに大変じゃが、それを維持修理する方が意外に大変なのはよく分かった。製造したモノをリサイクルするのも難しいじゃ。元の素材に戻すのも大変じゃ。なんとか元に戻せたとしても、同じ品質のモノを造るのも難しいのじゃな？」

「そうです。だからゴミとして処分します」

「果たしてAIは、大家さんが言うとおりで『できたモノはいずれ破棄される』という因果をきちんと理解できるのかしら」

田中が少し話の方向を変える。

「生命体は死ねば必ず元の素材に戻る。もちろん死ぬ前には自分と同じ生命体を造る。地球上の資源をうまく活用する。生命体は全体として地球の資源環境を利用して喧嘩しながらも協調してその種類を増やしてきた。でも人類が現れると状況は一変する。初めのうちはそうでもなかったが、元に戻れないモノをどんどん造るようになった。まるで自分たちの生活を便利にすることしか考えないから、あるいはそういう生活を独占しようと戦争までするようになった」

山本が悲しい表情で田中を見つめる。

「最後に核兵器まで製造して……」

## 第二章 スマートシティ